

以前行なった看護と介護の用語についての研究で、行為自体は同じでも呼び方が異なったり、在宅と施設では違った用法があることを知った。このように、当の本人は何の疑いもなく用いているのに、あらためて問われると曖昧なまま用いている言葉が何と多いことだろうか。本書のタイトルの「くせもの」も然りだろう。辞書では、変人、怪しい、正体不明、油断はできないなどとある。本書の著者らは、「どの意味が正しいとは一概に言えない言葉」を“くせものキーワード”と定義した。

言葉の使われ方の実態を踏まえて

多職種で構成するケアチームのそれぞれが、独立した専門職を自負している場合、自己の職務の範囲で頻用している用語をそう簡単に変えることはできないだろう。だが、ケアの方向性を決める際に、同じ用語をめぐるそれぞれが異なった解釈をしたり、同じ事象を異なった用語で表現していたのでは、チーム内での意思疎通が図れるはずはない。また、利用者への説明に際して、専門領域によって用いる言葉が異なっているのは、受け手の混乱を招くばかりである。

こうした、現場での言葉の使われ方の実態を踏まえて、共通の問題意識をもった著者らが、雑誌の連載と研究会を継続しながら、10年近くの年月を経て出版されたのが本書である。

著者らの共通認識は、「他職種協働」という新しい時代の要請に応える第一歩に、用語の整理と共通理解を位置づけたことである。こうして、「寝たきり老人」「社会的入院」など、これまで保健医療福祉

に関係する人々が、日常的に用いている28用語が取り上げられた。実践家を含む100名もの職種や研究者が集まって、激しい討論の末に生まれたという。このような本書の由来そのものが、1つの用語に多義性をもたらして「くせもの性」を強めたということになる。

「くせもの」の意味とは

事典というよりも、各章ごとに独立していて、読み物としても面白く読むことができる。読者は、その言葉の生まれた社会的背景や、その言葉に象徴される状態や人についての多角的な知識を得られる。そのうえ、各章ごとに「言葉の風景」としての具体的な事例があるので、初心者にも理解しやすい。また、それぞれに、関連用語の説明が簡潔に述べられているので、辞書的な用い方もできる。

実は、読み進めるうちに「くせもの」の意味が少し理解できた気がした。つまり、言葉は生き物で正体を現さず、その時その言葉を用いる人の思いが見え隠れし、それは、言葉を受け取る側の心象を反映した解釈となり得るということである。

それにしても、つくる人の数だけあるといわれる定義の本質を踏まえて、あえて定義をつくらなかったところに特徴があるキーワード事典である。それ故に、取り上げられた熟語の解釈の多様性が、かえって言葉の難しさを招いている面もある。専門用語を平易な日常語としていくためには、今後いつそうの検討を要すると思われる。そのような論議を深めるうえでも、職場ごとの討論や話題提供に、また、保健医療福祉の研究や教育に必携の著としてお勧めする。



保健医療福祉 くせものキーワード事典

保健医療福祉キーワード研究会
定価 2100 円
(本体 2000 円 + 税 5 %)
医学書院
TEL. 03-3817-5657

「他職種協働」の要請に応える 第一歩に

川嶋みどり 日本赤十字看護大学看護学部長

評
BOOK